

第2 事件被上告人弁論要旨

内藤淑子

1 私の被爆体験

75年前の8月、私は、生後11ヶ月、原爆が投下されたときのことは記憶にありませんが、母は、8月6日を迎えるたびに、私や姉たちにその時のことを話し、「こういうことは絶対にあってはいけんよね」と口癖のように言っておりました。この母や姉たちの被爆体験の話が私の被爆体験となって残っています。

私は、1男8女の末っ子で、母と姉たち、8人が直爆、うち2人が被爆死し、1人は今も行方不明です。原爆が投下されたとき、兄は兵役、父は岡山にいたが私たちを案じて戻ってきたので入市被爆です。

8月6日の8時15分、母に背負われ、五日市の叔母（父の姉）の家に向かうために、爆心地から2.4キロの広島電鉄己斐駅のホームにいました。閃光と爆風、母は、私を背中からおろし、ホームから飛び降りて私の上に覆いかぶさったそうです。そして、山の方に逃げ、「ああ！この子1人でも生きている」と安心したということです。それから、五日市の親戚を目指して歩き、己斐峠から石内峠を越えるときに、煤の様な黒い雨が降り始め、その中を歩きたどり着いたとのことでした。

娘たちを探しに行ってくれた伯父と一緒に、その日のうちに、手や顔や首に大火傷をした六女が、翌7日の早朝に、叔母、従弟、次女、五女、七女が帰ってきました。しかし、四女は、買い物の途中で被爆し、今も行方不明です。毎年張り出される死没者名簿を探していますが、見つかっていません。

6日の朝、女学校2年生の三女は、学徒動員されていた富士見町（ふじみちょう）で被爆し、背中全体に大火傷を負いました。父は避難先の府中町（ふちゅうちょう）から自転車に乗せて、連れて帰りました。姉の背中にはウジ虫が湧き、母は私を背負って姉の背中に沸いたウジ虫をピンセットで取っていたと話していました。8月16日に「お母ちゃん早よう来てー」という言葉を最後に亡くなりました。家族みんな、被爆者です。

2. 被爆後の健康状態

被爆後の私には、下痢・嘔吐・発熱の症状があったとき聞きました。母も、下痢や嘔吐が続いていたそうです。子どもの頃の私は、食が細く、身体の弱い子で、ときどき熱を出して学校を休んでいました。成人になっても、よく頭が痛くなり、高脂血症、血圧異常、白血球増加、脳動脈瘤など、いろいろな病気に罹り、今も苦しんでいます。

中でも、昭和58年、工作中にひどい頭痛に襲われ、痛みがひどくじっとしておられない状態でした。そのとき、血圧の測定をしてもらったところ最低血圧が40と言われ、大きなショックを受けたときのことが忘れられません。そして、その後は、毎年夏が終わり、秋を迎える頃になると体調が悪くなり、貧血、下痢、嘔吐、頭痛、じんましの症状がでるようになりました。その原因は解っておらず、今も繰り返し症状が出ます。

視力については小学校の健康診断の時、視力が悪いと言われて眼鏡をかけるようになりました。その後四十代後半の平成4年ころ目が見えにくくなったので眼科で診察したところ、両眼の白内障と診断されました。白内障は老人になって発症すると聞いていたので、驚きました。すぐに手術することはないとのことでしたので、その後は毎月眼科で診察と点眼薬をさしていました。そしてさらに見えにくくなったため医師と相談の上、昨年（令和元年11月）に右目について手術を受けました。左目についてはこれまで同様眼科で診察を受けています。

被爆後つぎつぎと原因不明の病気に襲われている私は、被爆二世である2人の子どもの健康も心配で、不安がつきまっています。

- 3 私たち被爆者が体験したことは、地球上のどこにおいても、2度と起こってはいけないのです。私たち被爆者は高齢となりました。私たちが生きている間に認定問題を解決してくださるよう、お願いします。